

コロナ禍でのオンライン授業に対する教員の認識について —理工学部における語学授業を中心に—

吉田 諭史・三木 浩平・陸 宗均

1. はじめに

2020年に発生した新型コロナウイルスのパンデミックにより、世界各国の教育機関において非対面で実施されるオンライン授業の導入が急務となった。この年を境に、オンライン教育はもはや欠かすことのできない教育方法のひとつとして広く浸透し（森田, 2022）、教育界は大きな転換期を迎えることとなった¹。コロナ禍に生じた授業形態の大きな転換は多方面に影響を及ぼす結果となり、教育の主たる享受者である学習者や急遽オンライン授業への対応を迫られた教員は言うまでもなく、オンライン授業を安定的に提供するために短期間で学内設備の拡充を強いられることになった教育機関にも大きな変革をもたらした。そのため、学校教育に関連する各種研究分野において多くの調査研究が実施されており、オンライン教育に関して様々な論考が重ねられている。また、オンライン教育の普及によってもたらされた、いわゆる「ニューノーマル時代」における教育の在り方についても活発な議論が行われている（千葉・石井・浦田・多田, 2022；村上, 2022）。

これらの動向を踏まえて、筆者らもオンライン授業に関する研究プロジェクト立ち上げ、本学理工学部の語学科目において実施されたオンライン授業に関する調査を行った。まず、2021年度に語学科目を履修した学生を対象としたアンケート調査を実施し、講演会を通してその成果を学内の語学教員と共有するとともに、そのまとめを本紀要に投稿した（陸・吉田・照井・三木, 2023）。本稿では、学生調査と同年度に語学科目を担当した教員を対象としたアンケート調査の結果を報告する。さらには、先行研究や学生調査（陸他, 2023）の結果と比較することを通して、近畿大学理工学部で展開された語学科目におけるオンライン授業を俯瞰し、総括することを通して、すでに対面実施に戻っている語学科目においてコロナ禍に培ったスキルや経験をいかに活用すべきか議論するための基礎データを提供したい。

2. 先行研究

コロナ禍以降、オンライン授業に関する多くの調査研究が実施されている。以下には、筆者らが先に実施した学生調査（陸他, 2023）および本稿にて報告を行う教員調査に関連した先行研究についてまとめる。

まず、オンライン授業の導入が学習者に対して及ぼす影響について検討を行った研究について概観する。永井（2021）は、世界中でオンライン授業が導入され始めた2020年度前期に大学・短期大学においてオンライン講義を履修した学生を対象とし、主体的な学修態度と非対面（オンライン）授業との適合について検討を行った。その結果、各学年から募った調査参加者（分析対象は489件）のうち、(1)学期中盤の時点で主体的な学修態度が高い1年生については、学期末になると非対面授業が自身に適合していないと感じる傾向があり、(2)学期中盤の時点で非対面授業が自身に適合していると感じる1年生は、学期末に主体的な学修態度が高い傾向にあった。また、上記(1)の結果を踏まえ、学修態度の高い学生はオンライン授業に満足できていなかった可能性について言及するとともに、今後より詳細な調査を踏まえて必要な支援を講じる必要性について言及している。

内田・黒澤（2021）では、コロナ禍に入学した大学1年生を対象として身体的・精神的な健康状態について調査を実施した。また、オンライン授業に対するニーズについて検討を行うべく、関連する要因として、通学環境や Visual Display Terminal（以下、VDT）症状、精神的健康、ひきこもり親和性に着目し、オンライン授業が大学1年生の大学適応に与える影響に関して検討を行った。その結果、(1)精神的な健康状態が良好でVDT症状も少ない、(2)自宅からの通学時間が長い、(3)ひきこもりの願望が高い、といった特徴がある学生がオンライン授業を希望する傾向にあることが示唆された。

次に、筆者らが実施した学生調査（陸他，2023）において、特に顕著な結果を示した「オンライン授業中におけるカメラオン・オフの影響」について扱った研究についてまとめる。Castelli and Sarvary（2021）は、2020年度の春学期にコーネル大学の学部生（分析対象は276名）を対象にオンライン調査を実施した。調査項目は、教育や授業デザイン、学生の授業体験等に関してフィードバックをする形式で設計されており、当該調査における最大の関心事である「オンライン授業においてカメラをオフにして参加した理由」について検討するために、予め11の理由と自由記述が可能な「その他」、さらには「常にカメラをオンにしていたので該当しない」という選択肢を設けた計13の質問項目が用意された。その結果、90%の調査参加者が少なくともオンライン授業中に時折カメラをオフにしていたことが分かり、その理由としてもっとも多く選択された理由は、「自身の見た目が気になった」（全体の41%）であった。次に回答が多かった理由は、「自身の後ろに他の人が見えてしまうことが気になった」（全体の26%）となり、その次に多かったのは「自身のインターネット接続が弱かった」（全体の22%）であった。また、「その他」（自由記述回答）を選択した学生の記述内容をコーディングした結果、もっとも多く分類されたカテゴリーは「それが標準（“It was the norm” [p. 3569]）だったから」であった。一方、「（講義に）注意を払っていないことをみられたくなかった」、「自身のパソコンから離

れているところを見られなくなかった」、「パソコンで他のことをしているのを見られなくなかった」など、学生側の印象が悪く映る項目についてはいずれも全体の7～8%程度しか選択されなかった。

Vasiljevic (2022) は、91名の日本人大学生を対象として、Castelli and Sarvary (2021) を部分的に模した調査を実施した。その際、Castelli and Sarvary (2021) の自由記述回答に着目し、「他の学生がカメラをオフにしていたため、自身は目立ちたくなかった」を選択肢として追加した上で調査を実施した。その結果、この新設した選択肢にもっとも多く回答が集まる結果となった。著者が説明する通り、この結果は「集団適合」に大きな比重を置く日本文化が影響していると考えられる。

その他の研究としては、オンライン授業における講師側のカメラ使用の有無が学習者に及ぼす心理的な影響について調査した研究(森泉・塚本, 2023)や、受講者側のカメラ使用の有無がオンライン授業を担当する講師や他の受講者の動機づけに与える影響について調査した研究(江, 2021)、オンライン上でのプレゼンテーション実施時におけるカメラ使用の有無が発表者に与えるストレスに関する研究(江原, 2022)などが公開されている。このように、オンライン授業中におけるカメラ使用の有無がもたらす影響は、教育関連分野におけるひとつの重要なテーマとして注目を集めている。

次に、学習環境に関する調査研究として、遠海・嶋田・千葉・川面・松井・岩崎・村上(2021)は、コロナ禍におけるラーニングコモンズでの学習支援の変化について調査した結果を報告している。コロナ禍前とコロナ禍(2020年度前期後期および2021年度前期)における学習環境や施設の運用状況等について調査を実施しており、その結果、感染状況を踏まえつつ、コロナ禍前まで対面で実施していた取り組みをできる限り継続する一方、オンライン活動を援用しながら、従来よりも幅広い学習支援が可能になった点が報告されている。同時に、施設担当者が直面した課題として、運用方針決定の難しさやスタッフ管理の難しさ、また、コミュニケーションの難しさ等についても報告されている。これらの点については、同データを再整理し、自由記述回答を含めて報告した遠海(2022)において詳述されている。

村上(2022)は、文部科学省が実施した学生調査の結果等を踏まえて、教員の創意工夫により、急遽導入されたオンライン授業でも対面授業とほぼ同様の教育が提供できた可能性について言及している。同時に、ニューノーマル時代における大学教育の在り方に関して議論を行う必要性についても言及しており、今後の課題として、オンライン教育における評価方法や学習環境の設計や運営等に関する議論を喚起している。

上述の通り、コロナ禍によってもたらされたオンライン授業は様々な分野で関心を引くこととなり、多くの論考が重ねられている。

3. 睦他（2023）による学生を対象とした調査結果の概要

本章では、睦他（2023）にて報告した学生調査の概要について再度まとめる。この調査では、理工学部の学生が受講した語学科目におけるオンライン授業についてどのような認識を持っているか調査することを通して、コロナ禍での語学教育を総括することを主な目的とした。1、2年生担当の英語必修科目および第二外国語の選択科目の受講生を対象として調査は実施され、有効回答数 1057 件のデータを得た²。質問紙は主に大学が行った同様の調査や、生協が行った学生の生活実態調査（全国大学生生活協同組合連合会，2022）およびその他の先行研究（大谷，2021；岡田，2021；高原・宮里，2021；平林，2021；睦・有馬・熊谷・須賀井・高橋・徳永・中野・原田，2020）を参考に作成され、多肢選択・複数回答・リッカートスケール（6 件法）・自由記述と多岐にわたる形式の質問で構成されていた。主な結果としては次の点が挙げられる。

-
- (1) 回答者の 9 割がオンライン授業に「満足」していた。
 - (2) 回答者の半数が自身の受講した語学科目授業は「オンラインが適切」と回答した。
 - (3) 教員の授業準備や ICT スキル、フィードバック、課題の分量は概ね「適切」と評価された。
 - (4) 全体的にオンライン授業が円滑に進行されていたと回答している学生が多かった。
 - (5) オンライン授業であっても、集中して授業に臨んだ学生が多く、一定以上は授業内容についても理解できていた。
 - (6) 学生はカメラ ON にすることに抵抗感があり、カメラ OFF での環境を好む傾向があった。
 - (7) 教員裁量が認められている「授業内活動」については、科目の性質の影響もあり、実施量にばらつきがみられた。
 - (8) 小テストの実施は積極的に行われており、学生もある程度の準備をして臨んでいた。
 - (9) オンライン授業に満足した要因も満足できなかった要因も必ずしも授業内容や学習効果に起因するものだけではなかった。
-

学生から得た回答データでは、授業内容やその授業効果とは直接的に関係しない部分も含め、オンライン授業を一定量支持する結果であったと言える。この結果に対して、授業担当教員自身のオンライン授業への認識について調査した結果を次章より説明する。

4. 本調査の概要

本調査の目的は、(1)2021年度当時に展開されていたオンライン授業の準備・実施状況をはじめ、教員側が実感した学生の学習状況や教員側の満足度等について実態を把握すること、(2)先行研究や学生調査(睦他, 2023)の結果と比較することを通して、近畿大学理工学部で展開された語学科目におけるオンライン授業を俯瞰し、総括することを通して、すでに対面実施に戻っている語学科目においてコロナ禍に培ったスキルや経験をいかに活用すべきか議論するためのデータを提供することであった。これらの目的を達成するため、本調査では教員向けに作成したアンケートを使用して量的および質的なデータを収集し、その分析結果を先行研究や学生調査の結果と比較することを通して授業評価を行うこととする。

4.1 調査用アンケート(質問紙)の詳細

使用した教員向けのアンケートは、学生調査(睦他, 2023)で使用した学生向けアンケートを参考にして作成した。質問内容から以下の通り、大きく2つに大別できる。1つめのパートは、回答する教員の背景情報(教員区分や担当言語・科目等)や履修科目に関する基礎的なデータを収集するための質問項目であった(詳細は次章および付録を参照)。2つめのパートは、オンライン授業で実施した科目に関する合計25項目の質問で構成した³。それぞれの質問項目は、学生調査の結果(睦他, 2023)と比較しやすいように作成した。質問への回答方法としては、多肢選択、複数回答、リッカートスケール(6件法)⁴、自由記述回答を採用している。また、すべての質問項目への回答を必須とした。

次に、調査方法としては、学生アンケートと同様に Google Forms を利用して 2022 年 3 月 25 日から 2022 年 4 月 6 日までの期間に回答を募った。

4.2 調査対象とした教員

調査対象は、理工学部1年生向けに配当されている必修科目「英語演習1・2」と2年生配当の必修科目「TOEIC 1・2」、さらには1年生配当の選択科目である「ドイツ語総合1・2」「フランス語総合1・2」「中国語総合1・2」「韓国語総合1・2」を担当していた各教員であった⁵。なお、本調査では各科目における実施状況等について実態把握することを目的に据えていたため、英語科目のうち「英語演習1・2」と「TOEIC 1・2」の両方を担当している場合にはそれぞれ別の回答を登録するように依頼した。その結果、37名の教員から合計43件の回答があった。内訳は表1にまとめる通りであった。

表1：調査参加者内訳（アンケート項目 Q1「教員区分」、Q2「担当言語」、Q3「担当科目」のクロス集計）

言語	科目	専任教員	非常勤講師	総計
英語	英語演習1・2	1	18	19
	TOEIC 1・2	0	10	10
ドイツ語	ドイツ語総合1・2	1	1	2
フランス語	フランス語総合1・2	0	1	1
韓国語	韓国語総合1・2	0	6	6
中国語	中国語総合1・2	1	4	5
総計		3	40	43

注：以降は、これら43件のデータをもとに分析および考察を行う。

4.3 分析方法

分析にあたっては、項目ごとに各選択肢の度数および百分率（%）を算出した。また、考察にあたっては、必要に応じて6件法における選択肢1、2、3（多くの場合、項目の間に対して否定的な回答）の回答割合を合算し、同様に選択肢4、5、6（多くの場合、項目の間に対して肯定的な回答）の回答割合を合算して比較等を行った。

5. 調査結果⁶

本章では、教員アンケート調査の結果について提示する。

5.1 背景情報に関する質問項目

まず、教員の背景状況として、「教員区分」（Q1）、「担当言語」（Q2）、「担当科目」（Q3）について回答を依頼した。前章に掲載した表1の通り、非常勤講師からの回答が多く、英語科目に関しては29件、第二外国語に関しては14件の回答があった。また、「担当学科」（Q4）をみると、回答者は万遍なく様々な学科の語学科目を担当していた（詳細は付録を参照）。「端末の利用状況」（Q5）としては、基本的にはほぼ全員がパソコンを利用しており、極少数の教員がタブレット端末やスマートフォン等の端末を併用していた。「利用した回線（複数回答）」（Q6）としては、自宅や大学の回線が多かったが、「スマートフォンのテザリング」に3件、「スマートフォン以外の通信回線（ポケットWi-Fi等）」に1件の回答があった。これらの結果を反映したのか、「自身が用意した回線の満足度」（Q7）および「大学内で利用した回線の満足度」（Q8）ではそれぞれ約8割程度の回答者

がどちらかという満足していた。「担当した語学科目の授業形態」(Q9)の回答からは、当時の担当教員の多くが何らかの形で「オンライン授業」を経験していたことがみてとれる。同時に、一部では対面授業やハイフレックス形式の授業も実施されており、コロナ禍での授業運営が2年目となった2021年度当時にはかなり複雑な科目運営となっていた様子が反映されている。

5.2 授業実施時に関する質問の結果概要

次に、「オンライン授業で実施した科目に関する質問」(25項目)の結果についてまとめる。その際、陸他(2023)と同様に、以下の9つの視点で質問項目をグループ化して報告する。なお、カッコ内にある「A-数字」は項目番号示しており、学生調査は陸他(2023)を指す。

(1) 約7割の教員がオンライン授業に「満足」していた。

担当科目をオンラインで実施したことに関して、67.4%の教員が肯定的な選択肢(4、5、6)を選んでおり、多くの教員が満足していた様子が確認できた(A-20)。一方、学生調査では、約9割の学生がオンライン授業に満足していた様子が確認できた。

(2) 約8割の教員が語学授業⁷において「効果的な学習を促進するためには対面授業が効果的」と回答した。

「担当科目において効果的な学習を促すためにもっとも適切だと思う授業形態」(A-24)については、回答の基準とした担当科目について、79.1%の教員が「対面授業」と回答しており、「オンライン授業」とした教員は18.6%、「オンデマンド授業」とした教員は2.3%であった。一方、学生調査では、約半数が適切な授業形態として「オンライン授業」と選択していた。

(3) 教員の授業準備やICTスキル、授業内外でのフィードバックに対する自己評価は概して高く、課題の分量については概ね「適切」と自己評価した。

「オンライン授業の準備状況」(A-1)としては、今回調査に参加した全教員が肯定的な選択肢を選んでおり、一定の準備をした上で授業に臨んだ様子が分かる。次に、「オンライン授業に必要なICTスキル」(A-2)については81.4%が肯定的な回答をしており、ある程度以上のスキルを身につけていたと自己評価した。「オンライン授業内外でのフィードバックの実施」(A-4)については97.7%が肯定的な回答をしていることから、教員学生間のコミュニケーションについても担保されていた様子が分かる。「課題の量」(A-5)

としては、97.7%が肯定的な回答をしており、ある程度以上の課題が出されていたことが分かる。「学習量と課題量の適切さ」(A-6)については、93%が肯定的な回答を行い、「適切」と自己評価した。学生調査においても、それぞれの項目に関して概ね肯定的に評価されていることから、これらの項目に起因した問題はそれほど多く生じていなかったと解釈できる。

(4) オンライン授業は円滑に進められたと自己評価した。

「オンライン授業の円滑な実施」(A-3)については、97.7%の教員が肯定的に自己評価した。学生調査からも、オンライン授業が円滑に進められた様子がみてとれる。

(5) 教員側からみて、学生はオンライン授業に集中して臨むことができおり、また、一定以上は授業内容についても理解できていた。

「学生のオンライン授業に対する集中度」(A-11)については、83.7%の教員が肯定的に回答した。また、「オンライン授業における学生の理解度」(A-12)については、86%の教員が肯定的に回答した。学生調査からも同様の傾向が確認できた。

(6) 教員側では、カメラをONにして授業に参加することは効果的と考えており、カメラOFFでの効果については約7割が否定的であった。

「カメラをONにして授業に参加することは効果的か」(A-16)について、90.7%の教員が肯定的な回答をしており、効果的であると認識していた。逆に、「カメラをOFFにして授業に参加することは効果的か」(A-17)については、65.1%の教員は否定的な回答であったが、30.2%の教員は選択肢4「ある程度効果的である」を選択した。また、「カメラをONにすることに対して学生の抵抗感があったと感じたか」(A-14)について、72.1%の教員が一定以上の抵抗感があったことを実感していた。

次に、「カメラのオン・オフに関する指示」(A-15)については、「特に指示をせず、受講生に任せた」(39.5%)への回答がもっとも多かった。本学では2020年度の段階で授業中にカメラ使用を必須にしないよう指示があったためであろう⁸。次いで回答が多かったのは「必要に応じて(ブレイクアウト時、グループワークや発話時)カメラをONにするように指示した」(27.9%)であった。これらの指示を受けた結果、「学生がどの程度カメラをONにしていたか」(A-13)に関しては、「終始オフにしていた」が62.8%、「基本オフだが教員の指示でオンにした」が25.6%となった。一方、学生調査の結果からは、学生はカメラをオフにして参加できる学習環境を好む傾向があることが示唆された。さらには、カメラをオンにして授業に参加することに対してはあまり効果を感じておらず、カメ

ラをオンにすることについて抵抗感を覚える学生が6割程度みられた。このように、「カメラのオン・オフ」に関しては、学生と教員の認識に大きな違いがあったことが浮き彫りとなった。

(7) ペアワークなど、教員裁量が認められている「授業内活動」については、教員および科目の性質により若干のバラツキがみられた。

バラツキがもっとも顕著にみられたのは「ペアワーク、グループワークの実施状況」(A-7)であった。46.5%の教員が一定量以上のペアワークまたはグループワークを実施していたが、残りの半数は一定量以下となり、27.9%はこれらの活動を全く設けていなかった。一方、「発話（単語の発音、音読、口頭で発表など）を伴う活動」(A-8)については、76.7%の教員が一定量以上は実施していた。次に、「オンライン授業中における学生から教員に対する質問や意見表明の機会の提供」(A-18)については、95.3%の教員が一定数以上実施していた一方、「オンライン授業中に学生同士が質問、相談する機会の提供」(A-19)については、55.8%の教員が一定数以下の機会提供となった。学生調査についても、こちらに類似する項目については授業の性質によってバラツキがみられた。

(8) 約7割の教員が小テストを実施しており、教員側からみた学生の準備状況は中程度であると認識

「小テストの頻度」(A-9)については、74.4%の教員が小テストを一定数以上実施していた。また、「小テストに向けた学生の準備状況」(Q-10)としては、72.1%の教員がある程度以上の準備状況であったと認識していた。学生調査においても、小テストが積極的に実施されていた様子や、学生がある程度準備して臨んでいた様子が確認できた。

(9) 「オンライン授業に満足した要因」としてはオンラインならではの利点が、逆に「満足できなかった要因」においてはオンライン授業に起因する様々な欠点が挙げられた。

「担当科目をオンライン授業で実施することに満足した要因」(A-21)として自由記述された回答を分析した結果、Google Classroom や Zoom 等、オンライン授業によって導入された各種ツールを活用した授業内活動や準備・運営に関する利点が挙げられた。例えば、Google Classroom の導入により課題配布・回収が円滑になった点や、Zoom 上の画面共有機能を利用した教材提示に関する利点、また、Zoom のブレイクアウトルームやチャット機能により、学生が質問等をしやすくなった点等が満足した要因として挙げられた。

一方、「担当科目をオンライン授業で実施することに満足できなかった要因」(A-22)

の回答を分析した結果からは、オンライン授業の内外で生じた多くの問題点が浮き彫りになった。例えば、科目運営やテスト実施の難しさ、カメラ利用に関する問題や不安感、教育効果に関する懸念、ICTスキルやインターネット環境に関連する問題等、オンライン授業への適応に際して多くの教員が直面した問題が記されていた。

一方、学生調査の結果をみると、オンライン授業に満足した理由、満足できなかった理由については、いずれの理由も授業内容や学習効果に必ずしも関連しているわけではなく、「感染防止のため」や「通学時間がなくなる」といった理由もみられた。

6. 考察

本章では、前章で概観した教員データの結果と学生調査（陸他，2023）の結果を比較しながら、特に顕著な違いや傾向がみられた以下3つの事項を取り上げ、適宜先行研究も引き合いに出しながら考察を深めたい（学生調査の設問情報については陸他（2023）より適宜抜粋・引用することとする）。

- (1) オンライン授業に対する満足度
- (2) オンライン授業におけるカメラのオン・オフの違いがもたらす学習効果への認識
- (3) 語学科目にもっとも有効である授業形態についての認識

6.1 オンライン授業の満足度（項目（1））

まず、5.2の(1)でまとめた通り、約7割の教員が語学科目をオンライン授業で実施したことに對して満足しており、学生調査（陸他，2023）では、約9割の学生がオンライン授業に満足していたことから、全般的にみると理工学部におけるオンライン授業はうまく機能していた様子が確認できた。村上（2022）がまとめる通り、パンデミックが開始した2020年から2年間という短い期間に多くの教員がオンライン授業に適応し、相違工夫をすることによってコロナ禍という難局にある程度対処できたといえよう。特に、Google Classroom や Zoom といった新しいツールを導入したことにより、オンライン授業であっても充実した授業実施に成功した教員が多くみられた。これらの点は、コロナ禍前に展開されていた従来型の対面授業から大きく進歩した点であり、一部の回答者からはオンライン授業特有のメリットがあった旨の記述も見受けられた。

ただし、一方で「担当科目をオンライン授業で実施することに満足できなかった理由」(A-22)の自由記述回答においては、「学生の反応や就学態度を確認できない」、「理解度を把握することが難しい」、「発話練習などを十分に行えない」等、オンライン授業の実施にあたって多くの語学教員が直面した問題点が指摘されていた。これらの結果は、コロナ

禍で急遽生じた授業形態の変更により、教員（特に非常勤講師）は通常の授業運営では本来不要な何らかの適応や対応を強いられたことを示しており、負担が生じていた様子が確認できる。本学理工学部では、2022年度前期からすでに全ての語学科目で対面授業が再開されている状況ではあるが、今回の調査を通して報告されたこれらの問題点を放置せず、大学・学部や語学の専任教員内で共有し、必要に応じて議論を行うことを通して、科目運営に際して生じうる教員側の負担等について理解を深めることが重要である。

6.2 教員と学生間にみられるカメラのオン・オフに関する認識の違い（項目（2））

次に、5.2の（6）にまとめた通り、オンライン授業中における「カメラのオン・オフ」について、教員と学生間には顕著な違いがみられた。教員側は、大学の指示もありカメラの使用を必須にできない状況ではあったが、約9割の教員がオンライン授業においてカメラをオンにすることは教育的な効果があると認識していた。一方、学生側は、カメラをオフにしても一定の教育効果があると感じており、また、約6割の学生が逆にカメラをオンにすることに関してはそれほど効果的であるとは感じていなかった。

Castelli and Sarvary (2021) が指摘する通り、オンライン授業においてカメラをオンにすること利点としては、非言語的な手がかり（nonverbal cues）を得られることや、教員と学生間において、また学生同士の間において良好な関係性を構築しやすい点がある。こういった利点は、本調査において語学科目の効果的な授業形態として「対面授業」を選択した教員の自由回答欄にも複数の記述がみられた。語学教員に限らず、多くの教員はコロナ禍前の対面授業を通してこういった対面授業の利点を無意識的に認識しているケースが多いと思われる。そのため、オンライン授業において対面授業と同等の効果をもたらすためにはカメラを使用にすることが望ましいと考えた可能性がある。一方、学生調査の回答者の中には大学における対面での語学科目の授業を受講した経験のない学生が多く含まれていることもあり、本来大学における語学科目において一定量実施されるべき発話や対話等のコミュニケーション活動を経験することがないままオンライン授業を受講していた状況のため、今回みられた乖離が生じている可能性がある。

さらに、多くの学生はカメラをオンにすることに抵抗感を覚えている様子もみられた。Castelli and Sarvary (2021) と同様に、学生調査（陸他、2023）においても、カメラをオンにすることで自身の「身だしなみ」や「他者（選択肢上は「家族」）、「自身の居場所（選択肢上は「部屋」）」がカメラに映り込むことを懸念する学生の他、「顔をみられたくない」といった理由からカメラをオフにしたと回答した学生が一定数みられた。また、Vasiljevic (2022) と同様に、「他の学生がOFFにしていたため、自分もカメラをOFFにした」といった理由からカメラをオフにする学生も一定数みられたが、回答者数全体

の2割程度であり、Vasiljevic (2022) のように主要な理由ではなかったようである。前述の通り、本学では2020年度の段階でカメラ使用を強要しない方針が出ていたため、このあたりで差異が生じていると思われる。また、Castelli and Sarvary (2021) では、「自身のインターネット接続が弱かった」といった理由が2割程度あったが、筆者らのデータ上で「通信環境が整っていなかった」ことを理由としてカメラをオフにしたのは、1057名中の72名であった。調査時期がコロナ禍2年目ということもあり、多くの学生がインターネット接続にはそれほどの問題を抱えていなかった点が示された。また、Castelli and Sarvary (2021) と同様に、教員に対して自身のネガティブな印象を与えるような理由（例えば、受講に適さない場所から受講していたことや、他のことをしているのをみられたくなかった等）も多くはなかった。ただし、今回の調査において著者らは後の追調査のことも念頭に置いて各回答者のメールアドレスを回収しており、この点によって回答者は上述のようなネガティブな回答を避けた可能性もある。したがってこの点の解釈は慎重に行うべきであろう。

6.3 教員と学生間にみられる効果的な授業形態に対する認識の違い（項目（3））

教員と学生間で顕著な違いがみられた3つ目の点は、語学科目としてもっとも効果的な授業形態に関する認識に関してであった。言語運用能力の向上を目指す語学科目では、対面授業がもっとも適切と回答した教員が約8割を占めた。一方、学生調査では、約半数が適切な授業形態としてオンライン授業が適切と回答していた。6.2でも言及した通り、多くの教員は過去の授業担当経験を通して、対面授業の利点として言外の情報を得やすいこと、授業内のみならず授業前後にコミュニケーションを取りやすいこと、関係性を構築しやすいこと等を無意識に認識していることが多いと思われる。ただし、「担当科目において効果的な学習を促すためにもっとも適切だと思う授業形態」（A-24）の回答理由を尋ねた自由記述（A-25）の内容を見ると、対面授業がもっとも適切と考える教員のうち、数名の教員についてはオンライン授業の利点についても理解しており、対面授業とオンライン授業の効果的な併用の必要性についても言及していた。加えて、もっとも効果的な授業形態としてオンライン授業を選択した教員については、「あくまでコロナ禍でマスクを着用しなければいけない前提ではオンライン授業が望ましい」、「感染対策上はオンライン授業が望ましい」といった、一種の条件付きで回答している教員が数名みられた。いずれにしても、教員側が示す理由の多くは基本的に授業内容や教育効果に直結するもので占められていた。

一方、学生調査では、約半数が適切な授業形態としてオンライン授業を選択していたが、授業内容や教育的効果には直接関係しないような理由からオンライン授業にメリット

を感じているケースも多くみられた。例えば、通学時間（片道）の平均は60分程度（標準偏差35.86、最頻値90分）であったが、オンライン授業に切り替えられたことにより、この時間がなくなったことは少なからず学生の選択に影響を与えたと考えられる。この点は、内田・黒澤（2021）の調査においても同様の可能性が示されている。感染リスクを軽減するために自宅や学内、その他外出先など、受講場所を自由に選択できたこともまた、オンライン授業が好まれる要因になっていたと考えられる。さらに、繰り返しになるが、本学ではカメラの使用を強制することは控えるよう教員に通知があったため、カメラのオン・オフの選択権が学生側にあり、カメラオフの学習環境を好む学生にとっては都合がよかった可能性も考えられる。

このように教員と学生間に認識の差が生じた要因のひとつとして考えられるのは、各語学科目の授業内容や性質の違いであろう。英語科目を例にとると、コミュニケーション能力の育成に重点を置く科目（例えば、理工学部の「英語演習1・2」）では発話を伴う活動が多くなるため、対面授業のメリットを享受しやすい。一方、「TOEIC 1・2」のように練習問題に解答した後、教員が解説を行う座学に近い要素も含まれる授業については、対面授業のメリットを認識する機会が必ずしも多くない状況にあった可能性も考えられる。また、多くの学生が大学から勉強を始めることになる第二外国語の各科目では、文法や単語など基礎的な知識の習得が主たる目的となるため、教員の説明が中心となる授業形態を取りやすい。そのため、クラスによっては、教員側が考えるような対面授業のメリットを学生が認識する機会が必ずしも多くない状況が生じていた可能性も考えられる。これら様々な要因の影響により、学生にとっては都合のよいオンライン授業が好まれる結果となり、教員側の認識との間に差異が生じたと考えられる。上記の通り、科目の内容や性質が授業形態の好みに対して影響を与える可能性があることが本調査の結果から示された。

7. 結論

本稿では、2020年度に急遽導入された近畿大学理工学部におけるオンライン授業に関して、(1)2021年度当時に展開されていたオンライン授業の準備・実施状況をはじめ、教員側が実感した学生の学習状況や教員側の満足度等について実態を把握すること、(2)先行研究や学生調査（陸他，2023）の結果と比較することを通して、近畿大学理工学部で展開された語学科目におけるオンライン授業を俯瞰し、総括することを通して、すでに対面実施に戻っている語学科目においてコロナ禍に培ったスキルや経験をいかに活用すべきか議論するためのデータを提供すること、を主たる目的として、2021年度末に本学理工学部の語学教員を対象として実施した調査結果を報告した。調査の結果、コロナ禍2年目の調査ということもあり、授業準備やICTスキルについて大きく不安を覚えている教員は

少なく、むしろオンライン授業のために導入された Google Classroom や Zoom といったツールの利点を活用しながら、充実したオンライン授業が展開されていた様子が確認できた。さらに、教員側の実感として学生の集中度や理解度もある程度担保されており、この点は学生調査（睦他, 2023）における学生側自身の学習に関する認識と一致していた。このことから、オンライン授業は概して円滑に進められていたことが示唆された。

オンライン授業の円滑な進行とともに本調査の結果から明らかとなったのは、約7割の教員が当時担当したオンライン授業に満足していた様子であった。しかし同時に、約3割の教員からオンライン授業に満足できなかったという回答が得られていることもまた見過ごすことができない点であった。その理由としては、語学教員の大多数を占める非常勤講師に対して、オンライン授業の導入によって生じた各種問題への対応等、従来は不要であった追加の対応を強いることにより大きな負担をもたらしていたことが明らかとなったためである。このような理由もあり、オンライン授業への満足度において教員と学生の間では若干の乖離がみられた。

さらに本調査では、オンライン授業におけるカメラ使用の有無がもたらす学習効果への認識と、語学科目にもっとも有効である授業形態への認識について、教員と学生の間で一定の違いがあることが示された。約8割の教員は、各種授業形態のメリットおよびデメリットについて認識しながらも、基本的には対面授業がより効果的な授業形態であると感じていた。一方で、学生は自身の周りの様々な環境要因も含めて、オンライン授業を効果的と評価する傾向がみられた。ただし、対面授業では言外情報を得やすいことや、教員と学生間、また学生同士の関係性が築きやすい等の利点を認識し、対面授業を希望する学生もまた全体の1/3程度みられた点にも注意を向ける必要がある。他方、本調査の自由回答項目において、「対面授業とオンライン授業の効果的な併用」の必要性について言及していた教員もみられた。

これらの結果を受け、今後に向けて重要なことは、対面授業とオンライン授業それぞれが有する利点について再度整理するとともに、効果的な併用方法についてもまた語学教員間で検討することであろう。理工学部の語学科目ではすでに全科目において全対面が再開されている状況ではあるが、現在でもなお Google Classroom や Zoom 等、コロナ禍で導入された教育ツールについては引き続き利用が可能となっている。もはや不可欠なツールとなっているために見落としがちであるが、例えば、Google Classroom を活用することにより、コロナ禍前の対面授業では授業中に紙ベースで配布していた各種授業資料を現在は授業外のタイミングでも配信可能であり、学生は教室外からいつでもこれらの教材に自由にアクセスできる学習環境が担保されている。こういった学習環境が構築されたことは、コロナ禍前に比べて大きな進化といえよう。さらには、Google Classroom 内の各種

課題機能（例えば、課題の共通編集機能等）を活用することにより、アクティブラーニング型授業を展開しやすくなった点や、チャット等の機能を活用することにより、従来よりも学生と教員間の交流を促進できる点もまたコロナ後の教育に対応する上で不可欠な要素と考えられる。また、Zoomについても対面授業の補助ツールとして利用が可能である。例えば、これまで授業内外でのサポートやケアが十分に行えなかった学生に対する補習指導や支援を行うことや、授業外で実施するグループ活動等を補助したり、録画機能を使用してグループワークを記録させたりすることも容易となった。その他、今後は海外の学生とリアルタイムでの交流を促進することも可能であろう。このように、コロナ禍のオンライン授業で手に入れた教育ツールは、今後実施される対面授業の幅を広げる可能性を秘めている。そのため、対面授業が再開されたことを理由にして単にコロナ禍前の対面授業に戻るのではなく、むしろこれを機会にオンライン授業で得た経験や知見を活用してより充実した授業について検討することが重要であろう。

本学では、現在もなお、一部の科目においてオンライン授業やオンデマンド授業が実施されている。今後、より充実したオンライン授業やオンデマンド授業を検討する際には、本稿で示した教員調査および陸他（2023）にまとめた学生調査をもとに、教員側に余計な負担を生じるさせることがなく、また、学生側が感じる利点と教育効果のバランスがとれた授業設計と運営がなされることを願いたい。同時に、今後も各語学教員がコロナ禍で培ったICTスキルを一層磨きつつ、各種ツールを効果的に利用しながら、より一層充実した授業が展開されることを期待したい。

謝辞

本研究の調査にご参加くださった近畿大学理工学部の語学科目を担当してくださっている先生方、学部学生の皆様にご心より厚く感謝申し上げます。また、理工学部教養・基礎教育部門の照井雅子先生には学生を対象として実施した調査の報告段階まで共同研究者として深く関わってくださっていただきました。ここに厚くお礼申し上げます。最後になりますが、本研究の投稿原稿に目を通していただき、有益なご助言をくださった査読者の先生方へ心より感謝の意を表します。

引用文献

- Castelli, F. R., & Sarvary, M. A. (2021). Why students do not turn on their video cameras during online classes and an equitable and inclusive plan to encourage them to do so. *Ecology and Evolution*, 11(8), 3365-3576. <https://doi.org/10.1002/ece3.7123>
- Vasiljevic, Z. (2022). Camera shy: Why Japanese students turn off their cameras during online classes. *Bulletin of The Bunkyo University Graduate School of Language and Culture*, 8, 77-108. <https://doi.org/10.15034/00007996>
- 内田知宏・黒澤泰 (2021). 「コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業 一心身状態とひきこもり願望」『心理学研究』92(5), 374-383. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.92.20076>
- 江原康生 (2022). 「オンラインコミュニケーションでのカメラ ON/OFF による発表者に与えるストレスに関する評価実験」『日本バーチャル・リアリティ学会誌』27(1), 14-16. https://doi.org/10.18974/jvrsj.27.1_14
- 遠海友紀・嶋田みのり・千葉美保子・川面きよ・松井きょう子・岩崎千晶・村上正行 (2021). 「コロナ禍におけるラーニングコモンズでの支援内容の変化に関する調査」『日本教育工学会研究報告集』2021(4), 41-44. https://doi.org/10.15077/jsetstudy.2021.4_41
- 遠海友紀 (2022). 「コロナ禍の学習環境に関する調査報告」『大学教育学会誌』44(1), 94-97. https://doi.org/10.60182/jacuejournal.44.1_94
- 大谷杏 (2021). 「新型コロナウイルスの影響による大学の英語オンライン授業－実践、その評価と課題－」『関西英語教育学会紀要』44, 21-39. https://doi.org/10.18989/selt.44.0_21
- 岡田佳子 (2021). 「学生からみたオンライン授業のメリットとデメリット –オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて–」『長崎大学 教育開発推進機構紀要』11, 25-41. <http://hdl.handle.net/10069/00040690>
- 江聚名 (2021). 「オンライン授業における受講者のカメラオン・オフが講師及び受講者の動機づけに与える影響」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』12, 70-75. <https://doi.org/10.14988/00028503>
- 全国大学生活協同組合連合会 (2022) 「第 57 回 (2021 年秋実施) 学生生活実態調査 速報 2022 年 1 月 31 日」 https://www.univcoop.or.jp/press/life/pdf/pdf_report57_pre.pdf (2023 年 5 月 22 日閲覧)
- 高原利幸・宮里心一 (2021). 「オンライン講義と対面講義における学生の意識比較」『工学教

- 育研究』29, 51-57. https://kitir.kanazawa-it.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002repository_20210310006
- 千葉美保子・石井和也・浦田悠・多田泰紘 (2022). 「ニューノーマル時代における学習環境・学習支援のデザインを考える」『大学教育学会誌』44(2), 173-178. https://doi.org/10.60182/jacuejournal.44.2_173
- 永井暁行 (2021). 「コロナ禍の非対面授業における学生の主体的な学修態度—非対面授業との適合との関連—」『心理学研究』92(5), 384-389. <https://doi.org/10.4992/jpsy.92.20322>
- 平林信隆 (2021). 「コロナ禍における大学のオンライン授業に対する新入生の認識についての探索的研究」『共栄大学研究論集』19, 56-66. <https://doi.org/10.15067/0000000626>
- 村上正行 (2022). 「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性—対象・方法・内容—」『大学教育学会誌』44(1), 76-77. https://doi.org/10.60182/jacuejournal.44.1_76
- 睦宗均・有馬麻理亜・熊谷哲哉・須賀井義教・高橋梓・徳永恭子・中野徹・原田信 (2020). 「近畿大学第二外国語科目に関する意識調査報告」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』11(1), 151-174. <https://kindai.repo.nii.ac.jp/records/21255>
- 睦宗均・吉田諭史・照井雅子・三木浩平 (2023). 「コロナ禍でのオンライン授業に対する学生の認識について—理工学部における語学授業を中心に—」, 『近畿大学教養・外国語教育センター紀要』14(1), 69-90. <https://kindai.repo.nii.ac.jp/records/2000015>
- 森泉慎吾・塚本彩日 (2023). 「オンライン授業における講師側カメラの表示が受講生に及ぼす心理的影響」『帝塚山大学心理科学論集』6, 35-42. <https://doi.org/10.57373/0000001741>
- 森田裕介 (2022). 「教育工学におけるオンライン教育」『日本教育工学会論文誌』46(4), 593-600. <https://doi.org/10.15077/jjet.46135>
- 文部科学省 (2020a) 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について (令和2年5月20日時点)」 https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (2023年5月20日閲覧)
- 文部科学省 (2020b) 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (令和2年6月1日時点)」 https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf (2023年5月20日閲覧)
- 文部科学省 (2020c) 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (令和2年7月1日時点)」 https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2023年5月20日閲覧)
- 文部科学省 (2020d) 「大学等における後期授業の実施方針の調査について (令和2年9月15日)」 https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2023年5月20日閲覧)

文部科学省（2020e）「大学等における後期授業の実施方針の調査について（地域別状況）令和2年10月2日）」https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2021a）「令和3年度前期の大学等における授業の実施方針等について」https://www.mext.go.jp/content/20210702-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（2023年5月20日閲覧）

文部科学省（2021b）「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針等に関する調査の結果について（令和3年11月19日）」https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2023年5月20日閲覧）

<付録>

(1) 背景情報に関する質問項目

1. 近畿大学での教員区分について選択してください。

Q1	回答数	%
専任教員	3	7.0%
非常勤講師	40	93.0%
総計	43	100.0%

2. 2021年度にご担当いただいた語学授業の言語について選択してください。

Q2	回答数	%
ドイツ語	2	4.7%
フランス語	1	2.3%
英語	29	67.4%
韓国語	6	14.0%
中国語	5	11.6%
総計	43	100.0%

3. 2021年度に担当いただいた1,2年生担当の科目を選択してください。

Q3	回答数	%
TOEIC 1・2	10	23.3%
ドイツ語総合1・2	2	4.7%
フランス語総合1・2	1	2.3%
英語演習1・2	19	44.2%
韓国語総合1・2	6	14.0%
中国語総合1・2	5	11.6%
総計	43	100.0%

4. 担当していた学科・コースを全て選択してください（複数回答可）

Q4	延べ回答数
理学科 物理学コース	7
理学科 数学コース	11
理学科 化学コース	10
応用化学科	9
機械工学科	10
生命科学科	6
社会環境工学科	6
電気電子工学科	11
情報学科	13
延べ回答数	83

5. オンライン授業の際に利用した端末を選択して回答してください。（複数選択可）

Q5	延べ回答数
パソコン	41
タブレット端末	6
スマートフォン	4
複数の端末を同時に使用	6
延べ回答数	57

6. オンライン授業を受講する際に利用した通信環境について、該当するものを全て選択してください。（複数選択可）

Q6	延べ回答数
自宅に設置された有線回線	15
自宅に設置された無線回線	28
大学に設置された有線回線（PC 教室）	4
大学に設置された無線回線（KUDOS_SECURE 等）	23
スマートフォンの通信回線（スマートフォンでの通信、テザリング）	3
スマートフォン以外の通信回線（ポケット Wi-Fi 等）	1
延べ回答数	74

7. ご自身で用意した通信環境の満足度はいかがでしたか。

Q7	回答数	%
1. 全く満足していない	2	4.7%
2. ほとんど満足していない	2	4.7%
3. あまり満足していない	4	9.3%
4. ある程度満足している	12	27.9%
5. ほぼ満足している	20	46.5%
6. 完全に満足している	3	7.0%
総計	43	100.0%

8. 大学内で利用した通信環境の満足度はいかがでしたか。

Q8	回答数	%
1. 全く満足していない	5	11.6%
2. ほとんど満足していない	1	2.3%
3. あまり満足していない	3	7.0%
4. ある程度満足している	9	20.9%
5. ほぼ満足している	22	51.2%
6. 完全に満足している	3	7.0%
総計	43	100.0%

9. Q3 で選択した授業の授業形態として該当するものを選択してください。

Q9	回答数	%
1. 前期：オンライン、後期：オンライン	21	48.8%
2. 前期：オンライン、後期：対面	3	7.0%
3. 前期：オンライン、後期：ハイフレックス (オンラインと教室対面の組み合わせ)	3	7.0%
4. 前期：オンライン+対面、後期：オンライン	10	23.3%
5. 前期：オンライン+対面、後期：対面	2	4.7%
6. 前期：オンライン+対面、後期：ハイフレックス (オンラインと教室対面の組み合わせ)	2	4.7%
7. 前期：オンデマンド、後期：オンライン (+一部オンデマンドも含む)	2	4.7%
総計	43	100.0%

(2) 授業実施時に関する質問の結果概要

A-1. この科目のオンライン授業のために事前準備（PPT 作成、Google Classroom の設定、動画の準備 etc.）をどの程度行っていましたか。

A-1	回答数	%
1. 全く行っていなかった	0	0.0%
2. ほとんど行っていなかった	0	0.0%
3. あまり行っていなかった	0	0.0%
4. ある程度行っていた	6	14.0%
5. ほぼ行っていた	7	16.3%
6. 完全に（毎回）行っていた	30	69.8%
総計	43	100.0%

A-2. この科目のオンライン授業を運営するために必要な ICT スキル（コンピュータ利用や会議システム利用に必要なスキル）をどの程度身につけていたと思いますか。

A-2	回答数	%
1. 全く身につけていなかった	1	2.3%
2. ほとんど身につけていなかった	1	2.3%
3. あまり身につけていなかった	6	14.0%
4. ある程度身につけていた	23	53.5%
5. かなり身につけていた	6	14.0%
6. 完全に身につけていた	6	14.0%
総計	43	100.0%

A-3. この科目のオンライン授業をどの程度円滑に進められましたか。

A-3	回答数	%
1. 全く円滑に進められなかった	0	0.0%
2. ほとんど円滑に進められなかった	0	0.0%
3. あまり円滑に進められなかった	1	2.3%
4. ある程度円滑に進めることができた	13	30.2%
5. ほぼ円滑に進めることができた	21	48.8%
6. 完全に（毎回）円滑に進めることができた	8	18.6%
総計	43	100.0%

A-4. この科目のオンライン授業の内外でどの程度質問に回答したり、フィードバックをしましたか。

A-4	回答数	%
1. 全くしなかった	0	0.0%
2. ほとんどしなかった	0	0.0%
3. あまりしなかった	1	2.3%
4. ある程度した	13	30.2%
5. かなりした	12	27.9%
6. 毎回（完全に）した	17	39.5%
総計	43	100.0%

A-5. この科目のオンライン授業において課題はどの程度出しましたか。

A-5	回答数	%
1. 全く出さなかった	0	0.0%
2. ほとんど出さなかった	0	0.0%
3. あまり出さなかった	1	2.3%
4. ある程度出した	11	25.6%
5. かなり出した	23	53.5%
6. 非常に多く出した	8	18.6%
総計	43	100.0%

A-6. この科目のオンライン授業における学習量と課題量は適切でしたか。

A-6	回答数	%
1. 全く適切ではなかった	0	0.0%
2. ほとんど適切ではなかった	1	2.3%
3. あまり適切ではなかった	2	4.7%
4. ある程度適切だった	17	39.5%
5. ほぼ適切だった	21	48.8%
6. 完全に適切だった	2	4.7%
総計	43	100.0%

A-7. この科目のオンライン授業においてペアワーク、グループワークの機会をどの程度設けましたか。

A-7	回答数	%
1. 全く設けなかった	12	27.9%
2. ほとんど設けなかった	5	11.6%
3. あまり設けなかった	6	14.0%
4. ある程度設けた	14	32.6%
5. かなり設けた	4	9.3%
6. 完全に（毎回）設けた	2	4.7%
総計	43	100.0%

A-8. この科目のオンライン授業において、発話（単語の発音、音読、口頭で発表など）を伴う活動をどの程度設けましたか。

A-8	回答数	%
1. 全く設けなかった	4	9.3%
2. ほとんど設けなかった	2	4.7%
3. あまり設けなかった	4	9.3%
4. ある程度設けた	17	39.5%
5. かなり設けた	8	18.6%
6. 完全に（毎回）設けた	8	18.6%
総計	43	100.0%

A-9. この科目のオンライン授業において小テストの回数をどの程度設けましたか。

A-9	回答数	%
1. 全く設けなかった	2	4.7%
2. ほとんど設けなかった	2	4.7%
3. あまり設けなかった	7	16.3%
4. ある程度設けた	11	25.6%
5. かなり設けた	11	25.6%
6. 完全に（毎回）設けた	10	23.3%
総計	43	100.0%

A-10. この科目のオンライン授業における小テストに対して受講生はどの程度準備をして臨んでいましたか。

A-10	回答数	%
1. 全く準備せずに臨んでいた	3	7.0%
2. ほとんど準備せずに臨んでいた	0	0.0%
3. あまり準備せずに臨んでいた	9	20.9%
4. ある程度準備して臨んでいた	22	51.2%
5. かなり準備して臨んでいた	5	11.6%
6. 完全に（毎回）準備して臨んでいた	4	9.3%
総計	43	100.0%

A-11. この科目のオンライン授業に対して受講生はどの程度集中して参加していましたか。

A-11	回答数	%
1. 全く集中せずに参加していた	1	2.3%
2. ほとんど集中せずに参加していた	2	4.7%
3. あまり集中せずに参加していた	4	9.3%
4. ある程度集中して参加していた	23	53.5%
5. かなり集中して参加していた	13	30.2%
6. 完全に（毎回）準備して臨んでいた	0	0.0%
総計	43	100.0%

A-12. この科目のオンライン授業を通して、受講生は授業内容をどの程度理解できたと思いますか。

A-12	回答数	%
1. 全く理解できていなかった	0	0.0%
2. ほとんど理解できていなかった	1	2.3%
3. あまり理解できていなかった	5	11.6%
4. ある程度理解できていた	22	51.2%
5. かなり理解できていた	15	34.9%
6. 完全に（毎回）理解できていた	0	0.0%
総計	43	100.0%

A-13. この科目のオンライン授業において受講生はカメラをどの程度 ON にして受けていましたか。

A-13	回答数	%
授業開始から終了までカメラは OFF にして授業を受けていた	27	62.8%
授業開始から終了までカメラは ON にして授業を受けていた	3	7.0%
授業中、基本的には OFF としていたが、あなたが指示した際（ブレイクアウトセッション時など）には時々 ON にして授業を受けていた	11	25.6%
授業中、基本的には ON としていたが、受講生の都合で時々 OFF にして授業を受けていた	2	4.7%
総計	43	100.0%

A-14. この科目のオンライン授業においてカメラを ON にすることに受講生はどの程度抵抗があったと思いますか。

A-14	回答数	%
1. 全く抵抗はなかった	1	2.3%
2. ほとんど抵抗はなかった	5	11.6%
3. あまり抵抗はなかった	6	14.0%
4. 少し抵抗があった	8	18.6%
5. かなり抵抗があった	14	32.6%
6. 非常に抵抗があった	9	20.9%
総計	43	100.0%

A-15. この科目のオンライン授業におけるカメラ ON に関して、どのような指示を出されましたか。

A-15	回答数	%
授業全体を通してカメラを ON にするように指示した	4	9.3%
特に指示をせず、受講生に任せた	17	39.5%
必要に応じて（ブレイクアウト時、グループワークや発話時）カメラを ON にするように指示した	12	27.9%
その他（自由記述）	10	23.3%
総計	43	100.0%

A-16. カメラを ON にして授業を受けることは語学学習にどの程度効果的であると考えますか。

A-16	回答数	%
1. 全く効果的でない	0	0.0%
2. ほとんど効果的でない	1	2.3%
3. あまり効果的でない	3	7.0%
4. ある程度効果的である	18	41.9%
5. かなり効果的である	10	23.3%
6. 非常に効果的である	11	25.6%
総計	43	100.0%

A-17. カメラを OFF にして授業を受けることは語学学習にどの程度効果的であると考えますか。

A-17	回答数	%
1. 全く効果的でない	10	23.3%
2. ほとんど効果的でない	4	9.3%
3. あまり効果的でない	14	32.6%
4. ある程度効果的である	13	30.2%
5. かなり効果的である	2	4.7%
6. 非常に効果的である	0	0.0%
総計	43	100.0%

A-18. この科目のオンライン授業中に、受講生が先生に質問したり、意見を述べたりできる機会をどの程度設けましたか。

A-18	回答数	%
1. 全く設けなかった	0	0.0%
2. ほとんど設けなかった	1	2.3%
3. あまり設けなかった	1	2.3%
4. ある程度設けた	16	37.2%
5. かなり設けた	10	23.3%
6. 非常に（毎回）設けた	15	34.9%
総計	43	100.0%

A-19. この科目のオンライン授業中に、受講生同士で質問したり、相談できる機会をどの程度設けましたか。

A-19	回答数	%
1. 全く設けなかった	7	16.3%
2. ほとんど設けなかった	8	18.6%
3. あまり設けなかった	9	20.9%
4. ある程度設けた	11	25.6%
5. かなり設けた	6	14.0%
6. 非常に（毎回）設けた	2	4.7%
総計	43	100.0%

A-20. この科目をオンライン授業として実施することに対してどの程度満足しましたか。

A-20	回答数	%
1. 全く満足していない	5	11.6%
2. ほとんど満足していない	1	2.3%
3. あまり満足していない	8	18.6%
4. ある程度満足している	16	37.2%
5. かなり満足している	11	25.6%
6. 完全に満足している	2	4.7%
総計	43	100.0%

A-24. この科目において効果的な学習を促すためにもっとも適切だと思う授業形態を選択してください。

A-24	回答数	%
オンデマンド授業	1	2.3%
オンライン授業	8	18.6%
対面授業	34	79.1%
総計	43	100.0%

(3) 自由記述回答の設問：A-21、22、23、25（質問文のみ掲示）

A-21. この科目をオンライン授業として実施することに対して満足した理由を記述してください。

A-22. この科目をオンライン授業として実施することに対して満足できなかった理由を記述してください。

A-23. これからのオンライン授業の質を上げるために最も期待することは何ですか。

A-25. 上記 A-24 の回答を選択した理由について今年度の授業形態を踏まえて簡単に記述してください。

¹ 睦・吉田・照井・三木（2023）にて詳説している通り、パンデミック初期の2020年5月には日本の大学の9割が全面的にオンライン授業を導入していた（文部科学省，2020a）。その後、一部対面授業の再開により、「全面的にオンライン授業」で授業運営を行う大学の数は減っていったが、2021年度の段階になっても何らかの形でオンライン授業を継続し、対面授業との併用により授業運営を行う大学は6割程度であった（文部科学省，2020b，2020c，2020d，2020e，2021a，2021b）。これらのデータから、パンデミックを契機として、日本の高等教育にオンライン授業が浸透していった様子がみとれる。

² 理工学部学生センターによれば、学生調査を実施した2021年度に調査対象とした理工学部の各外国語科目を履修していた学生数は以下の通りであった。「英語演習1」1236名、「英語演習2」1280名、「TOEIC 1」1034名、「TOEIC 2」1021名、「ドイツ語総合1」158名、「ドイツ語総合2」144名、「フランス語総合1」82名、「フランス語総合2」77名、「中国語総合1」484名、「中国語総合2」472名、「韓国語総合1」340名、「韓国語総合2」314名。

³ 学生向けのアンケートでは、当時の授業形態に沿って詳細な調査をすべく、「(1)オンライン授業」、「(2)オンデマンド授業」、「(3)オンライン授業+オンデマンド授業」に関する質問セットを使用した。今回の教員調査にて対象とする科目は全て「オンライン授業」が実施されていたため、教員向けアンケートは1セットのみであった。

⁴ 睦他（2023）でも言及した通り、6件法を採用した理由は、回答が中央に集中しないように選択肢を偶数個にするためである。

⁵ 理工学部学生センターによれば、本調査を実施した2021年度に調査対象とした理工学部の各外国語科目を担

当した教員数は以下の通りであった。「英語演習1・2」33名、「TOEIC 1」25名、「TOEIC 2」24名、「ドイツ語総合1・2」8名、「フランス語総合1・2」3名、「中国語総合1・2」17名、「韓国語総合1・2」8名。

- 6 本調査で使用したアンケートの仕様上、6名の教員が担当科目である「英語演習1・2」と「TOEIC 1・2」、それぞれに関する回答を登録した。同一教員による回答ではあるが、今回のアンケートでは担当科目ごとの状況について回答するよう依頼しているため、それぞれ独立した回答として扱った。そのため、以降で扱う割合(%)値については、全43件を分母として算出した値を掲載する。
- 7 ここで「語学授業」は、自身が担当する科目であり、また、今回実施した調査における回答のベースになった科目である。英語科目において、複数の科目を担当している場合にはそれぞれ独立した回答をお願いした。
- 8 例えば、2020年度の後期に向けて学生、教員、保護者宛に配信された学内文書『【重要】後期授業の録画保存・視聴に関する学生への注意事項について』には、オンライン授業を録画した動画データが後日公開されることを想定し、プライバシー保護の観点から、原則として授業中はカメラとマイクをオフとすること、学生が発言する際にはマイクをオンにするが、カメラについては学生の希望によりオフでも構わない旨が通知されている。